

和歌山県立博物館評価(令和4年度事業評価用)

<p>博物館長による所見</p>	<p>令和4年度の特別展「きのくにの大般若経—わざわいはらう経典—」は、十分な調査研究に基づいた展観で、地道ながら地域文化の豊かさの一端をよく示していた。また特別展「浜口梧陵と廣八幡宮—法蔵寺・養源寺・安楽寺の文化財とともに—」は、津波被害を未然に防いだ梧陵の事績や関連の文化財を紹介し注目を集めた。総じて企画展はその内容において学芸員の力量がよく発揮できたものであり、今後もこの水準を維持し、調査研究の還元を図りたい。昨年度末、2名のベテラン学芸員が定年となり、再任用として引き続きフルタイムで学芸業務に就いているが、総じて若手学芸員への業務の円滑な継承が急務である。とくに令和6年度の大規模展を含めた今後の展覧会計画は、具体化を急ぐ必要がある。新型コロナが5類へと移行したことに伴い、徐々に制限の緩和が可能かどうか臨機に判断する必要が生じている。引き続き感染対策にも留意しつつ、入館者・参加者が安心できる環境作りを考えたい。普及・教育・広報の分野といったアウトリーチの強化に向けて、当該分野の能力に長けた専門職員の採用が不可欠である。人口減少、寺院の無住化等は文化財の盗難を誘発し、危機はさらに高まっている。「お身代わり仏像」の事業はますます需要が高まると考えられるが、それに伴い収蔵スペースの確保も喫緊の課題で、工夫はしているものの限界が近づいている。</p>
<p>評価部会による所見</p>	<p>令和4年度も新型コロナウイルス感染症の影響を少なからず受けたとはいえ、安心を担保したうえで徐々に制限を緩和する方向で博物館活動をおこない、入館者数も前年度比では減少したものの、令和2年度比では増加しているなど、若干の回復傾向にあった点は一定の成果といえよう。また限られた学芸員数のなかで、展示・調査研究・教育普及・保存管理など、多様な活動に取り組んでいる点は大いに評価できる。ただし、学芸員2人は定年退職し(引き続きフルタイムの再任用)、産休・育休中の学芸員がいるなど、学芸員の定数と比べても少ない人員で活動しているのが現状である。学芸員の世代交代と知識・ノウハウの継承は急務であり、計画的に新規採用や人員の補充を進めていくことが求められる。今後の収蔵資料の増加も見越して現在の収蔵庫の収容量を明確化し、今後の収蔵庫の増設計画等を考えるべき時期に来ている。収蔵品のデジタル化とその公開については、博物館法改正に先駆けて進めたことは評価できる。より一層わかりやすく、かつアクセスしやすいかたちでの運用を期待したい。調査研究は、これまで通り進められており、外部機関との共同研究の成果が展示などにも結実していることは評価できる。展示は、博物館の調査研究活動の成果を十分に示せてはいるものの、来館者からのアンケート結果のフィードバックが十分でなく、その仕組みを考えていく点が課題と考える。教育普及について、学校利用がコロナ禍(令和元年)以前の水準を保っていることは評価できるが、紀南地域の学校利用の促進についてはなお課題を残す。出張展示・出前授業などの対応策を模索されたい。ツイッターなどのSNSを活用した広報が一定の効果を得ていることは評価したい。</p>

令和4年度 和歌山県立博物館評価様式

1. 資料収集・管理

博物館長による所見	資料購入のための予算増額については、継続的に要求することが必要だが、質の向上のために高額資料の購入をも可能とする仕組みを作る必要がある。収蔵品のデジタルデータ化は順調にスタートできたが、今後も計画的に事業を推進し、さらに円滑・有用に公開が図れるよう配慮したい。収蔵庫スペースの確保は資料の重要度も鑑み、移動も行って一定の残存率を確保するよう努め、環境を把握しつつ防虫・防菌・防霉も適切に行われている。文化財保護を念頭に、他館への貸し出しなども積極的に対応できている。
評価部会による所見	博物館資料の購入について、恒常的な資料収集活動は重要であり、継続的な予算の確保に努めるべきである。収蔵品のデジタルデータ化をおこなったことについては評価できるが、「和歌山ミュージアムコレクション」の公開については、広報・アクセス方法などに課題が残る。収蔵品は今後とも増加していくことが見込まれるため、収蔵庫の占有状況について数値基準を明確化して今後の収蔵能力の状態を把握し、収蔵庫増設をも視野に入れ、中長期的な計画を立てるべきである。他機関への貸出基準の明確化をすすめるとともに、積極的に貸し出しをすることができるよう留意すべきである。

①資料収集

(1)適正な資料・図書の収集とその数量の把握

令和4年度目標	「和歌山博物館施設デジタル化計画事業」(1年目)に合わせて、館蔵品画像のデジタルデータ化を計画的に進める。
自己評価	「和歌山博物館施設デジタル化計画事業」(1年目)として、収蔵品管理データベース(I. B. MUSEUM)への移行を行うべく、調書データ・画像データ等の整理を行い、4683件のデータ(館蔵品1179件、寄託品2900件、過去に寄託受けていた資料のデータ604件)について、従前のデータベースから新たなデータベースへとデータを移行した。
課題・改善案	高精細画像の撮影(20件)を実施し、収蔵品管理データベース(I. B. MUSEUM)に写真画像・調書データを追補していく。

②資料保存

(2)資料の保存環境管理、点検調査、資料の修復

令和4年度目標	収蔵庫内の棚・棚板増設を具体的にどの場所から行うか、中長期計画を立てる。収蔵庫内定期清掃・整理について、当番制で担当者を明確にして実施する。
自己評価	現在の収容率はおおよそ約80%。一部の資料について収蔵庫内での資料の移動、収蔵庫内にある不要な演示具・梱包資材などの整理をしてスペースの確保を行った。また、定期的(2ヶ月に1度)に掃除をおこなった。
課題・改善案	一部スペースは確保できたものの根本的な改善には至っていない。棚増設の予算化へ向けての作業は引き続き行う。掃除については、担当者が毎月実施するように努める。

③資料管理

(3)資料の管理方法、全体の数量の把握

令和4年度目標	近代美術館、紀伊風土記の丘とも情報交換しながら、年度末までに館蔵品のデータベースの公開を行う。
自己評価	現在、館蔵品1,179件25,860点、寄託品2,671件16,821点(預り証書発行件数2900件)。近代美術館、紀伊風土記の丘とも情報交換しながら、館蔵品を公開する「和歌山ミュージアムコレクション」(https://wakayama.museum/)としてデータの公開をおこなった。
課題・改善案	高精細画像の撮影(20件)をしつつ、公開用の画像データを追加していく。館蔵品・寄託品の収蔵状況の確認を行う。

④資料の活用

(4)他機関への貸出、資料の情報公開

令和4年度目標	貸出基準の明文化を速やかに行い、画像利用申請にかかる手続きについては押印の廃止など簡素化をすすめる。
自己評価	貸出基準の明文化は検討中である。画像利用に係る許可書発行は、押印廃止などで簡素化した。
課題・改善案	貸出基準の明文化を速やかに行う。画像利用申請の手続きについては、収蔵品のデジタル公開とあわせて、国立の機関等に準じてクレジット表記のみ行えば申請不要とできるようなかたちを検討する。

2. 調査・研究

博物館長による所見	学芸員の調査研究の成果は展覧会の展示に着実に還元されている。調査データは、今後の企画展等のベースになるものであり、適切に共有化され有効に活用されるべきで、そのためのルール作りを急ぐ必要がある。調査研究の成果は内部の紀要のみならず学術誌等でも公にされている。調査員や調査補助員の採用を可能にし、とりわけ分析化学・保存科学分野においては大学等との連携も視野に入れ、補完を図ることが望ましい。
評価部会による所見	学芸員の調査研究活動は、積極的に進められ、成果が生まれている。これからは継続的に調査研究を進め、様々なかたちで成果を発信していくべきである。他機関との共同研究の成果が展示に結びついたことは評価できる。今後も他機関との共同研究の道を検討、継続すべきである。科学研究費補助金の採用率が高いことは一定の評価ができるので、さらに申請内容について、博物館学に関わるものなど、様々な方向性・可能性を摸索していただきたい。また調査成果のデータ整理と利活用のルール化は早急におこなうべきである。

①調査研究活動

(5)適正な調査研究、調査研究データの整理、共同研究の実績

令和4年度目標	調査研究データ(テキスト・画像)のルールを定めて集積し、共有化をはかる。他機関との共同研究は、研究内容を精選しながら進めていく。
自己評価	データ名・ファイル名や収納先など、共有化するためのルール(基準)の明確化はできていない。他機関との連携・共同研究は前年度と同様6件あった。特別展1件(「きのくにの大般若経」)、企画展1件(「川とともに生きる」)は共同研究の成果を展示し、共同研究に関わる講座・講演会4件をおこなった。
課題・改善案	データ蓄積のルール化について明確化する。他機関との連携・共同研究については例年と同程度参加するとともに、展示やイベントなどを通じてその成果を公開していく。

②研究成果の活用

(6)展示・教育普及活動等への反映、学術的公表

令和4年度目標	令和3年と同様に、館の事業と関連して研究成果の公表につとめるとともに、外部での公表の機会を積極的に利用する。
自己評価	展覧会・研究紀要・講演会などでの研究成果の公表は従前通り実施した。研究成果を公表した講演会・講座は計12回(館内での学芸員による講座含む)、論文などの公表は10本(図録は含まず)。
課題・改善案	令和4年度と同様に、研究成果の公表に努めるとともに、外部での公表の機会を積極的に活用して研究活動の社会還元を図る。

3. 展示

博物館長による所見	特別展2本、企画展7本など、総じて展示は内容も充実しており、今後も継続させたい。令和6年度大規模展の企画については、早期に具体化させる必要がある。常設展については、令和8年度のリニューアルを目指し、内容の再検討、レプリカやパネルの新規作成・更新なども念頭において、早急に実施計画を策定すべきである。
評価部会による所見	展覧会は特別展・企画展いずれも博物館の調査研究に立脚した充実した内容であると評価できる。今後も水準を落とさないように継続していくべきである。来館者からのアンケートの集計・分析、その公表・フィードバックの方法が十分確立されていないことは課題である。その方法など今後しっかりと検討すべきである。それぞれの展覧会の意図や成果・課題などについて、後に残るように記録していくことが求められる。常設展のリニューアルについては、外部の検討組織を設けるなどの方向性も含めて、時間をかけて検討すべきである。来県者への和歌山県域の通史展示はかなりの比重が必要である。

①常設展

(7)展示の更新、計画的な保守・管理

令和4年度目標	模型・パネル・複製などの種類ごとに、修正が必要な内容についてピックアップする。音声ガイドについては、企画展示室での来館者端末を利用した方式を試験的に実施する。
自己評価	具体的にどのような模型・パネル・複製にするか十分検討し切れていないため、見積を取るには至っていない。パネル展「よみがえる和歌山県 県勢歌」では、音声データの紹介を来館者の端末を利用する方式で実施することができた
課題・改善案	常設展の内容の更新（リニューアル）について、博物館協議会・利用者などの意見を参考にしながら、中長期的な案を策定する。

② 特別展・企画展

(8)コンセプト・構成・展示手法、成果物、来館者・展示資料の安全

令和4年度目標	令和6年度は大規模展を行う予定であり、学芸員の構成の変動も念頭に置きながら、令和6年度までの計画を下半期までに策定し、協議会などに諮るようになる。
自己評価	令和6年（2024）年度の大規模展については計画案を作成したが、協議会に諮ることはできなかった。なお、令和5年度博物館協議会で諮る予定である。
課題・改善案	令和6年度の大規模展については、令和5年度の第1回博物館協議会にて諮る。また令和7年度の特別展についても、第1回の協議会で方向性を示したうえで、秋までに素案を作成し第2回目の協議会に諮る。

③ 館内小展示・出前展示

(9)実績とコンセプト

令和4年度目標	今年度も資料の保全に留意しながら、随時開催する。
自己評価	2階文化財情報コーナーにおいて、その都度時宜にあった企画として、「シシ推し！ kawaiiわかやまの獅子—令和4年度学芸員実習生による展示—」、「家の由緒書を読む」の2本、また常設展示室でパネル展示「よみがえる和歌山県 県勢歌」1本を開催するなど、フレキシブルに展示を企画・開催した。
課題・改善案	今後も資料の保全に留意しながら、3回程度開催する。

④入館者の傾向

(10)アンケートの分析

令和4年度目標	アンケートの回収率を高めるために、入館者にアンケートを周知する方法や回収場所への案内方法などを検討し、アンケートの集計情報をホームページで公開する。
自己評価	昨年度低下した回収率は、例年並の8.2%に回復した。アンケート結果のホームページ上での公開には至っていないが、概要は年報で公開している。
課題・改善案	入館者にアンケートを周知する方法や回収場所への案内方法などを検討し、アンケートの集計情報の分析を行う。

4. 教育普及

博物館長による所見	新型コロナウイルスの5類移行に伴い、徐々に制限を緩和する方向であるが、高齢者等の利用も踏まえ、安心を担保したうえで臨機応変に対応する必要がある。従来型の講演会・講座等に加え、見学会・ミュージアムトーク・ワークショップなどでは双方向型のイベントも積極的に実施したい。学生のみならず一般のボランティアの導入は、建設的な意見を得るためにも有効と思われ、実施を視野に課題を整理する必要がある。教育普及部門の専門職員の配置が急務である。
評価部会による所見	コロナ禍のなか、学校利用についてはコロナ禍（令和元年）以前の水準を保っており評価できる。生徒への口頭の展示解説や、子どもにも展示内容をわかりやすく伝えるための工夫が成されており、評価できる。なおさらなる工夫も必要である。また、展示解説会やワークショップ、現地見学会などの各種イベントは、コロナ禍以前のように実施できるように努めるべきである。紀南地域の学校への対応については、携行可能な資料を持参した出前授業を実施するなど、対応策とその目標を設定すべきである。

①学校・団体の利用

(11)学校・団体の利用実績と広報活動

令和4年度目標	参加者の安全に留意しながら、特別展や企画展で取りあげる地域の学校への広報を積極的に行っていく。
自己評価	学校団体の利用実績は、35校1,212人で一昨年度と同程度であった。校数は前年度比で2校増、人数は239人減であった。年間の全入館者数が減少した割には、学校利用の件数・人数は大きく変化していない。またコロナ禍以前の令和元年度（42校1300人）と比較しても、それほど減少はしていない。
課題・改善案	県教育委員会総務課・文化遺産課とも連携・情報共有しながら、県内市町村担当者や県内学校への広報・周知を行い、令和4年度並みの利用を図る。また増加する利用にも対応できるようにするために、教育普及担当職員の配置を教育委員会に求めていく。

②講演会・博物館講座

(12)講演会・博物館講座の実績、参加者へのアンケート調査

令和4年度目標	感染予防対策を講じながら、可能な範囲で実施する。制限する内容については、感染状況をつまえながら、臨機応変に対応していく。
自己評価	事前申し込み制のうえ人数制限（2階学習室25人、AVホール50人）をしながら、講演会・博物館講座は従来と同じ程度の頻度で開催することができた。特別展にあわせて計5回（学習室2回計47人、AVホール3回計86人参加）開催した。
課題・改善案	感染予防対策にも留意しながら、制限内容を徐々に取り除きつつ、できる限り制約のない形態で実施できるように努め、参加者数（AVホール使用の場合は1回50人程度）の増加を図る。

③展示解説・ワークショップ・見学会・関連行事等

(13)実績の把握、参加者へのアンケート調査

令和4年度目標	展示解説を安全に再開できる方法を検討し、実施していく。
自己評価	展示解説（ミュージアム・トーク）は、人数制限など感染対策を講じながら実施した（27回実施、303名参加）。
課題・改善案	制限を可能な限りなくしつつ、コロナ禍以前と同程度の頻度で、展示解説（ミュージアム・トーク）を実施する。また、現地見学会などの各種イベントもコロナ禍以前のように開催できるようにする。

④県民との協業

(14)ボランティア・友の会などの活動実績、観光事業との連携

令和4年度目標	和歌山大学ミュージアムボランティアについては、参加者の安全に留意しながら、従前と同じメニューで実施する。ただし、着彩については、和大学生に限らず、幅広く募集できないかを検討する。一般のボランティアの募集については、引き続き募集を検討する。
自己評価	和歌山大学ミュージアムボランティアは、6名の学生が延べ38回参加し（前年度6名19回）、「さわれるレプリカ」の着彩、館蔵・寄託資料の調査に従事した。一般のボランティアの募集については、行うことができなかった。
課題・改善案	和歌山大学ミュージアムボランティアについては、従前と同じメニューで実施する。着彩などについては、一般のボランティアや友の会の協力を受けるなど、より広く博物館活動に参加できる仕組みを検討する。

⑤人材育成

(15)学芸員実習・インターンシップ・教員研修などの受入実績

令和4年度目標	参加者の安全に留意しながら、希望者がいれば受け入れる。「けんぱく・こどもゼミ」については、受験の時期を考慮して、夏休みに実施できないか検討する。
自己評価	学芸員実習（1回・5名）及び教員研修（2回・24名）は例年通り実施した。インターンシップは新型コロナウイルス流行のため、実施校は4校5名（前年度3校4名）にとどまった。「けんぱく・こどもゼミ」は、過去の参加予定者の意見などをふまえ、夏休み期間に実施した（2コース各5回、参加者計15名）。
課題・改善案	インターンシップは、コロナ禍以前の水準に戻るよう、可能な限りで受け入れる。「けんぱく・こどもゼミ」については、他の教育普及事業のスケジュールとの関係で、冬に実施する（1コース6回開催、10人程度受け入れる）。

⑥文化財に関する相談への対応

(16)問い合わせ・質問(電話・来館等)への対応実績

令和4年度目標	記録すべき内容をまず明確化して、この基準に従って実施する。
自己評価	対応件数は、575件（76件増加）。
課題・改善案	記録すべき内容を明確化したうえで、台帳を作成し基準に従って記録する。

5. 広報・情報発信

博物館長による所見	HPの充実やSNSを利用した広報にも力点を置くべきだが、閲覧件数を増やし入館者増へ導くためには、専門的知識をもった人材が必要である。ポスター・チラシの配布、メディアへの情報提供は十分に行われているが、さらに実効性を検証しつつ方法の見直しを行うことが望ましい。生徒を対象とした学校単位でのオンライン学習の場を持つことは現状では難しいが、10分程度で施設や展示の紹介を行うなど新たな方法を工夫したい。
評価部会による所見	ツイッターなどSNSを活用した広報を積極的におこない、それが一定の成果を得ていることは評価できる。コロナ禍のなかで普及したWEB公開や動画（YouTube）配信など、新たなコンテンツの作成、広報戦略も考えるべきである。ポスターやチラシなどの広報物も、どの層（他府県や外国人の観光客など）に向けて宣伝するかなど、戦略的に行う必要がある。観光客の来館を促すような広報も検討すべきである。

①メディアへの情報発信

(17)取材への対応・掲載の実績

令和4年度目標	報道機関への資料提供以外にも、情報を提供する方法を模索する。
自己評価	報道機関への資料提供回数は12回（例年より3回減少）。特別展については、展覧会の対象地域（令和4年度秋特別展の広川町、令和5年度春特別展の湯浅町）をターゲットに、市町村と協力しながら町報への掲載などの広報を行った。
課題・改善案	効果的なタイミングで資料提供をするなど、時期なども考えたうえで情報提供を行う。展覧会の内容や地域にあわせて、対象となる団体に働きかけるなど、資料提供以外の別の角度からの広報手段を検討する。

②ホームページの運営

(18)アクセス件数・更新回数、コンテンツ・デザイン等の工夫

令和4年度目標	リニューアルした画面がより快適に利用できるように、さらに検討する。
自己評価	令和3年度にリニューアルしたホームページの改善の検討は行うことができなかった。ツイッターなどのSNSを駆使した情報の提供を積極的におこなった（年間Tweet数195回、フォロワー数約6400人）。フェイスブックを新たに開設した（更新回数33回）。ホームページ年間閲覧件数は63,055件。
課題・改善案	ホームページに載せる内容の整序・充実を目指す。引き続き、SNS（ツイッター・フェイスブック）などを活用した広報を取り入れ、年間200Tweet、フェイスブックの更新50回を目指す。

③印刷物の制作

(19)ポスター・チラシ・館だより・カレンダー等の制作実績

令和4年度目標	特別展ごとの入館者目標も念頭に置きながら、印刷枚数や配布枚数を検討する。
自己評価	特別展ごとに印刷枚数を設定して（春特別展45,000部、秋特別展50,000部）チラシの配布をおこなった。そのほか特別展以外にも、「けんぱく・こどもゼミ」の募集にあわせて夏の企画展「地名のなぞ!？」のチラシを作成し（40,000部印刷）、県内の小学校（5・6年生と教員）・中学校（全生徒と教員）に配布した。
課題・改善案	特別展ごとの入館者目標も念頭に置きながら、印刷枚数や配布枚数を検討する。また、春・秋の特別展以外にチラシ・広報物を制作する手段なども検討する。

④さまざまな広報手段

(20)多様な広報手段の検討

令和4年度目標	通常予算の特別展での新たな広報手段を検討する。
自己評価	特別展については、展覧会の対象地域（令和4年度秋特別展の広川町、令和5年度春特別展の湯浅町）をターゲットに、市町村と協力しながらチラシの全戸配布や町報への掲載などの広報を行った。
課題・改善案	通常予算の特別展でのチラシ作成以外、企画展などでもチラシを作成する手段を検討する。SNS（ツイッター・フェイスブック）などを活用した広報を積極的に取り入れる。

6. 組織と運営

博物館長による所見	学芸員の交替の時期に差しかかっている。新採用の学芸員に対し円滑な業務継承ができるよう、前倒し採用を進める必要がある。学芸員の研修等が十分に受けられるよう関係部署に働きかけ実現させたい。令和6年度の大規模展の具体化にあわせ入館者確保に向けての戦略も総合的に考えたい。本評価も含め情報公開は着実に実施されている。大地震等の大規模災害に備え、訓練を実施しつつ館独自のマニュアル作成を行うべきである。
評価部会による所見	学芸員の数が少ないなか、展示・調査研究・教育普及・保存管理など様々な活動に取り組んでいることは大いに評価できる。学芸員の世代交代に際して、ベテラン学芸員の知識やノウハウが適切に若手学芸員に継承されるように努めるべきである。また、教育普及の専門的担当者が必要であるが、定員数が限られるなかでは、今後はボランティアの活用も考えていく必要があるだろう。地震時における館独自の対応マニュアルは早急に作成するべきである。

①組織・人員、職員研修

(21)適切な人員配置についての検討、各種研修への参加実績

令和4年度目標	若手学芸員が、文化財に関わる国実施の研修に参加できる環境づくりを進める。円滑に事務継承できるように、館内での研修を行う。
自己評価	文化財に関わる国実施の研修に、1件（保存科学研修に）応募したものの参加者多数で採用されなかったため、参加する機会を持つことができなかった。具体的な作業実践を通じて、業務の継承を行った。
課題・改善案	新規学芸員の採用に向けて、時期・専門分野についての検討を行い、学芸員の新規採用について準備を進める。若手学芸員が、文化財に関わる国実施の研修に参加できる環境づくりを進め、積極的に応募する。また円滑に事務継承できるように、館内での研修を行う。

②利用者数

(22)利用者数の把握・分析

令和4年度目標	入館者はコロナ前の35,000人をめざす。これまであまり取りあげられなかった地域を対象にした展覧会を開催することで、県民全体にとって魅力ある内容となるよう努めていく。
自己評価	入館者数は24,677人で、前年度比で見ると9,250人の減少となった。ただし、令和2年度と比べると増加しており、コロナ禍のなかでは回復傾向にある。
課題・改善案	入館者はコロナ前の35,000人をめざす。また、県民が関心のあるテーマ・内容の展覧会を開催することで、県民全体にとって魅力ある博物館となるよう努めていく。

③情報公開

(23)使命、目標、計画、評価などの整備・公開

令和4年度	「和歌山県文化財保存活用大綱」における「文化財の保存と活用の基本方針」をふまえた当館の役割については、公開を行う。
自己評価	「博物館の使命」および前年度の博物館評価についてはホームページで公開した。
課題・改善案	下半期に令和4年度評価をホームページ上で公開するとともに、令和5年度目標を策定する。

④危機管理

(24)危機管理・防災体制に館するマニュアル作成、実地訓練等の実施実績

令和4年度目標	和博連の構成員としての対応と、館独自の対応との関係についての方向性・方針を検討する。火災以外の訓練(地震など)もマニュアル化する。
自己評価	和博連の構成員としての対応については「和歌山県文化財保存活用大綱」の作成において協力し明確化したが、「大綱」の完成が令和4年度末であったため本年度において館独自の対応との関係についての方向性・方針の検討はできなかった。火災以外の訓練(地震など)もマニュアル化についてはできていない。
課題・改善案	「和歌山県文化財保存活用大綱」に基づき、館独自の対応との関係についての方向性・方針の検討を行う。火災以外の訓練(地震など)もマニュアル化する。

7. 施設・設備

博物館長による所見	大規模改修が進捗しているが、ユニバーサル化も考慮し、近代美術館とも緊密に連携しつつ、館内外の環境整備に努め、安心・安全な施設づくりを目指したい。収蔵庫の空調改修に当たっては庫内の文化財の安全を第一に考え、移動も含め時期や人員など綿密な計画を策定する必要がある。
評価部会による所見	引き続き感染症対策をしっかりとおこない、多くの来館者が安心して博物館を利用できるように配慮すべきである。障害者も安心・満足できるような動線（点字ブロック・点字シールなど）・展示方法について検討する必要がある。今後、和歌山城周辺の景観整備とも関連させながら、博物館の外に設置している看板等の更新・整備も検討されたい。

①施設設備の維持管理

(25)日常的な点検・改修保全の実施実績、安全衛生の管理、中長期修繕計画

令和4年度目標	外壁改修を実施するとともに、展覧会スケジュールと連動するエレベータ改修・空調改修の計画を近代美術館と協議して、決定する。
自己評価	外壁の改修を実施している。エレベーター改修・空調機改修（令和7年度）に関する中期的な計画を近代美術館と協議して決定した。
課題・改善案	空調機改修にあたり、改修時に収蔵庫内の資料群をどのようにするか、様々な可能性を摸索し、文化庁と協議するためのデータの集積を行い、実施時の方向性を定める。

②アメニティーの向上

(26)バリアフリー・ユニバーサルデザイン等への対応

令和4年度目標	館内を移動する障害者が、目的とする場所への動線がよりわかりやすくなるような方法を検討する。
自己評価	館内を移動する障害者が、目的とする場所への動線がよりわかりやすくなるような方法の検討については、行うことができなかった。
課題・改善案	館内を移動する障害者が、目的とする場所への動線がよりわかりやすくなるような方法（点字ブロック・点字シールなど）について検討する。

8. 財源

博物館長による所見	<p>確実な業務遂行のために現状を下回らない予算の確保が必要である。また普及・教育・広報分野の強化に資する人材と財源の確保が急務と考えられる。科学研究費も含め、外部の競争的資金の獲得も積極的に進め、展示事業や調査研究の補完を図りたい。</p>
評価部会による所見	<p>博物館資料の購入について一定額が確保されてきたことは評価できる。今後も和歌山県の歴史的・美術的な史料の散逸を防ぐために、恒常的な予算の確保は必要で、現状の予算は維持するべきある。科学研究費の採用率が高いことは評価ができ、直接財源とはならないが、調査・研究費の実質上乘せとして間接効果がある。科学研究費補助金の申請内容については、博物館学などの視点も盛り込み、様々な方向性・可能性の模索が課題である。</p>

①予算の確保

(27)財源の確保、歳入実績

令和4年度目標	<p>通常事業に必要な財源の維持のため、若い世代の人がより利用しやすくなるための方法を検討し、歳入をあげるための努力を行う。</p>
自己評価	<p>歳入を上げるための取り組みとして、若い世代の人がより利用しやすくなるための方法を検討はできていない。</p>
課題・改善案	<p>当館の社会的使命や機能について理解が深まるよう、様々な機会（展示・教育普及）を通じて、県民や来館者へ働きかけを行う。より図録などが買やすくなるよう、現金書留以外による郵送購入方法の検討を進める。</p>

②外部助成金等

(28)外部助成金等の獲得実績

令和4年度目標	<p>文化庁補助金・科学研究費補助金などの獲得につとめる。</p>
自己評価	<p>文化庁 令和4年度文化芸術振興費補助金によるInnovate MUSEUM事業（お身代わり仏像制作、および「お身代わり仏像製作記録集」の作成）を実施したが（事業費3,880千円）、同内容事業の継続申請が認められなくなったため、次年度の申請は行わなかった。科学研究費補助金事業に1件申請し1件採択された（780千円）。</p>
課題・改善案	<p>引き続き文化庁補助金（展覧会開催関係）・科学研究費補助金などの獲得につとめる。</p>